

ヤハウエはとこしえに王

——詩篇145篇と146篇の「類型」と「編集」の一研究——

石川 立

詩篇145篇と146篇はともに「賛歌」の類型に属している。「賛歌」については他の類型とともに H. Gunkel 以来、多くの研究者によって考察されてきた。それらの考察は主に「賛歌」の様式および様式の歴史に関してであり、詩篇を歴史的に解釈する上で大きな示唆を与えた点で評価できる。¹⁾しかしながら、その類型がどのような状況で用いられたのか、どういう目的で使用されたのか、どのような機能を果たしていたのか、など、詩篇の類型とその詩篇を産んだ状況との生き生きとした関係についてはほとんど考察されてこなかったことも事実である。ここでは、「賛歌」としての詩篇145篇と146篇を例にとって、それらの成立の状況を推測し、「賛歌」という「類型」が状況に対していかに創造的に関わったかを考察したいと思う。

最近の詩篇研究では、書物としての「詩篇」がどのような時代を背景に、どのような意図のもとに、どのような経過をたどって編集されてきたかに関心が集まっている。²⁾このような「詩篇」の編集研究によれば、「詩篇」最終編集においては、145篇は第3篇から続く大歌集をしめくくる詩篇であり、146-150篇は1-2篇と共に、その大歌集を囲む枠として機能しているとされる。³⁾そうだとすれば、145篇と146篇は形式的に、大歌集の最終詩篇とその大歌集を囲む枠のなかの一詩篇という関係を持つ。しかし、両詩篇は隣接詩篇として、内容的にも密接な関係を持っているように思われる。ここでは145篇と146篇の編集史的な背景とともに、編集の意図などを探ってみたい。

I. 詩篇145篇の解釈

詩篇145篇はヤハウエの王的な統治を賛美している。その支配は力強いと

同時に恵み深い。この詩篇全体の調子は作者のヤハウェに対する深い信頼に満ちている。ここでは、ヤハウェはいついかなるところでも彼を信じる者に恵みを与えるという信仰が述べられ、ヤハウェとその普遍的な支配がほめられたえられている。この内容からすると、作者は順風満帆の状況でこの詩を創作したかに見える。しかし本当にそうなのであろうか。むしろここで述べられている作者の信頼は、当時の世俗の支配がもたらした苦境のなかで、それとの葛藤によって勝ち取られた勝利の信頼なのではないだろうか。詩篇成立当時の政治的、社会的、宗教的状況では、「統治」についての激しい論争が行われていたが、この詩篇はその論争の一つの立場としてヤハウェによる王的統治のプログラムを提示しているのではないか。そうだとすれば、この詩篇の中には当時の「統治」に対する論争の表現が反映されているはずである。

ところで、145篇は各節冒頭がアレフベートの順番に並ぶという技巧的な作法によっている。このことから、この詩は「読まれる」ことを目的として机上で作成された教育的な作品であるとも推定できる。⁴⁾確かにこの技巧的な詩篇は綿密な机上の作業によって創作されたであろう。しかし、当詩篇が劇的な賛歌の構造を持っている以上、作者はこれが公共の祭儀もしくは祭儀的な場で効果的に上演されることを念頭においていたとも考えられるのである。

もし、145篇の背景に「統治」に関する論争があり、この詩篇もその論争に無関心ではありえなかったとすれば、これが「統治」に関するあるプログラムを提示しているとも仮定できる。そうであれば、この詩篇がたんに穏やかな教育的な目的のために「読まれる」ことを目指して作成されたとは考えにくい。むしろ、公の場で、世俗の「統治」に対抗するヤハウェによる「統治」のプログラムを主張し、共同体から賛同を得るといふ、きわめて政治的、宗教的⁵⁾な目的を持っていたのではないだろうか。

さて、詩篇145篇を考察していく前に私訳を以下に掲げるが、これはとくに段落分けにおいて、筆者の詩篇理解をすでに前提としている。

1a 賛美。ダビデの詩。

b わたしはあなたをあがめます、わが神、王よ。

⁶⁾
(yiqtol)

- c あなたののみ名をほめたたえます、いつまでも、永遠に。(yiqtol)
- 2a 日々わたしはあなたをほめたたえます。(yiqtol)
- b あなたの名を賛美します、いつまでも、永遠に。(yiqtol)
- 3a ヤハウエは大なる方、おおいにほむべきかな。(NS)
- b その「大なるみ業」は計り知れない。(NS)
- 4a 人は代々にあなたの「み業」(=被造物)をほめます。(yiqtol)
- b 彼らはあなたの「力強いみ業」を知らせます。(yiqtol)
- 5a 彼らはあなたの威光の栄光に満ちた輝きを語ります。⁷⁾(yiqtol)
- b わたしはあなたの「驚くべきみ業」を歌います。(yiqtol)
- 6a 彼らはあなたの「恐るべきみ業」の力強さを告げます。(yiqtol)
- b わたしはあなたの「大なるみ業」を物語ります。(yiqtol)
- 7a 彼らはあなたの多くの「恵みのみ業」の思い出を告げ知らせます。(yiqtol)
- b 彼らはあなたの「正しいみ業」を喜び歌います。(yiqtol)
- 8a ヤハウエは恵みに富み、憐れみ深い。(NS)
- b 怒るに遅く、慈しみは大きい。(NS)
- 9a ヤハウエはすべてのものに恵み深い、(NS)
- b その憐れみはその被造物すべてに及ぶ。(NS)
- 10a あなたの被造物はすべてあなたに感謝します。(yiqtol)
- b あなたの「敬虔なる人々」はあなたをたたえます。(yiqtol)
- 11a 彼らはあなたの王権の栄光を告げます、(yiqtol)
- b あなたの「力強いみ業」を語ります。(yiqtol)
- 12a 彼らはあなたの⁸⁾「力強いみ業」を人の子らに示します、(inf)
- b また、あなたの王権の栄光に満ちた輝きを。⁹⁾
- 13a あなたの王権はとこしえの王権です。(NS)
- b あなたの統治は代々に。(NS)
- 13c ヤハウエはそのすべての言葉に忠実、(NS)
- d そのすべての行いにおいて慈しみ深い。¹⁰⁾(NS)
- 14a ヤハウエは倒れる人々をすべて支え、(pt)
- b うずくまっている人々をすべて起こされる。(pt)

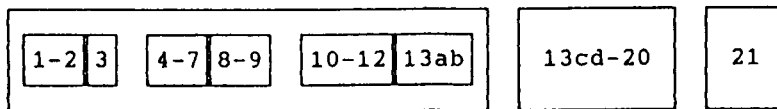
- 15a みんなの目があなたを待ち望むと、 (yiqtol)
 b あなたは時に応じて彼らに食べ物を与えてくださいます。 (pt)
- 16a あなたは手を開き、 (pt)
 b すべて命あるものを恵みによって満足させてくださいます。 (pt)
- 17a ヤハウェはそのすべての道において正しく、 (NS)
 b そのすべての行いにおいて慈しみ深い。 (NS)
- 18a ヤハウェは彼を呼ぶ人々すべてに近くいます、 (NS)
 b すべてまことをもって彼を呼ぶ人に。
- 19a (ヤハウェは) 彼を畏れる人々の望みを満たし、 (yiqtol)
 b 彼らの叫びを聞いて彼らを救ってくださる。 (yiqtol+yiqtol)
- 20a ヤハウェはすべて彼を愛する人々を守り、 (pt)
 b すべて神なき者たちを滅ぼされる。 (yiqtol)
- 21a わたしの口はヤハウェの賛美を歌う、 (yiqtol)
 b すべて肉なるものは彼の聖なるみ名をほめたたえる、 (yiqtol)
 c いつまでも、永遠に。

a. 詩篇145篇の構造

このアレフベート詩は、賛美を促す命令形で始まっていないので、いわゆる命令形賛歌には属さないが、その構造は命令形賛歌に類似している。¹¹⁾命令形賛歌の典型的な構造は、導入としての「賛歌への促し」、賛歌そのものとしての「ki-文」¹²⁾、賛歌の動機説明としての「神の行為の記述」、結び、から成る。145篇では導入形式が三度見出され、それらは yiqtol の形で、祈り手の賛美への決意、もしくは、民や全被造物がヤハウェの行為を物語ってほしいという祈り手の願いを表現している。この三つの導入形式とは、1-2、4-7、10-12節である。これら各部分に続く3、8-9、13ab節はそれぞれ名詞文であり、¹³⁾賛歌そのものを表している。それらに続く一連の名詞文・分詞文と yiqtol 形の動詞文から成る13cd-20節は、ヤハウェの行為を記述している。結び(21節)では祈り手と全被造物によるヤハウェ賛美が告白される。

こうしてみると、当詩篇は命令形賛歌の形式に従って三部分に分けること

ができる。つまり、1-13ab、13cd-20、21節である。1-13ab節では、導入と賛歌そのものとの結びつきが三度ある。これを図に表すと次のようになる。



b. 「類型」と「生の座」

詩篇145篇は、その構造を見ると、命令形賛歌の形式を意識しているように思われる。1-2、4-7、10-12節の各部分は確かに命令形賛歌における「賛歌への促し」ではない。しかしながら、これらの節は「わたし」、「人々」および「全被造物」によるヤハウェ賛美の意志を表現しており、「賛歌への促し」と内容的につながる。さらに、14、15b、16、20a各節には「賛歌的な分詞」¹⁴⁾が見られ、これらのことから、当詩篇は形式的にも「賛歌」の類型に属すると規定できる。この詩篇は形式上アレフベート詩として作成されたので、その制約から、賛歌としての形式が後退したものと考えられる。

アレフベート詩としての形式上の制約によって賛歌の形式が見えにくくなっているとはいえ、この詩の中心テーマは「ヤハウェの王権」であり、そのことの宣言、ほめたたえとして、当詩篇は内容的には明らかに「賛歌」として機能している。そのかぎりでの詩篇が公の祭儀のなかで用いられたことを否定することはできない。より古い時代においてはそもそも、王としてのヤハウェへの賛歌は神殿での礼拝のなかで使用されていたからである。¹⁵⁾ここでのアレフベート形式を、ヤハウェ賛美という主テーマに適用した二次的な文学的技巧と見なせば、¹⁶⁾この詩篇の目的は、たんに教育的な場で「読まれる」ことであるよりも、祭儀共同体のただ中で声を出してヤハウェを賛美することだったと言えるのではないだろうか。実際、13ab節におけるヤハウェの王権の主張のように、祭儀につどった人々の共感のなかで、声高く宣言されるにふさわしい表現も用いられているのである。

c. 各部の考察

詩篇145篇の第一部(1-13ab節)は、恵み深く慈しみあるヤハウエの支配(A)と、力強く偉大なヤハウエの支配(B)が交互に記されている点で特徴的である。すなわち、A-B(1-3節)、B-A(4-9節)、A-B(10-13ab節)と並んでいるのである。13cd節以降はヤハウエの力強さではなく、もっぱらヤハウエの行為の正しさと恵みが歌われている。

i) 1-3節

この段落が、上述のように、命令形賛歌の「賛歌への促し」と「賛歌そのもの」に対応するとすれば、1-2節が前者に対応して賛美することを約束しており、3節が後者に対応して「賛歌そのもの」を表していると言える。

1b節には「わが神、王よ」という表現があるが、この神称号「王」はイザヤ以来の伝統であり、¹⁷⁾当詩篇が成立した捕囚後の時代に用いられていても驚くに値しない。しかし、世俗の王が実際に君臨している時代にこの称号をヤハウエに当てはめることには特別な意味がある。この詩篇は世俗の王を最初から無視し、ヤハウエを王として宣言しているのである。従って、1節の神称号「王」にはすでに世俗の王国と神の王国との緊張関係が含まれているのであり、この緊張は当詩篇全体を通じてその基調にあるように思われる。

1-2節のヤハウエの「名」は出エジプト記34章6節のヤハウエの啓示場面を暗示していると考えられる。実際、詩篇145,8では出エジプト記のこの部分が引用されているのである。出エジプト記34,6では、ヤハウエは自らの名を名乗ることを通して、自らが憐れみ深く、恵みに富むことを宣言している。詩篇記者はヤハウエの一般的な偉大さや強さよりも、民に対する恵み深い配慮にもっとも大きな関心を抱いていたのではないだろうか。

以上の考察からすでに、この詩篇全体のおおよその方向性が推察できるのである。すなわち、作者は、世俗的な統治には被支配者に対する愛の配慮が欠けているがゆえにそれを拒否して、慈しみと恵みに富んだヤハウエの王的支配のみを認め、その憐れみや恵みの深さを歌おうとしているのである。

しかし、3節では、ヤハウエの慈しみではなく、その偉大さと行為の大き

さが歌われている。これはどういうことであろうか。

ii) 4-9 節

この段落でも命令形賛歌の「賛歌への促し」と「賛歌そのもの」に対応する要素を見出すことができる。4-7 節は、主語は一致していないが、その動詞はすべて *yiqtol* で表され、賛美の約束が言い表されている。8-9 節は名詞文で、「賛歌そのもの」に対応する。

4-6 節では、ヤハウエの業の大きさ、力強さの賛美が述べられる。ところが、7 節では、ヤハウエの恵み深さ (*twb*) や正しい配慮 (*šdqh*)¹⁹⁾ が語られ喜ばれるのである。

8-9 節は出エジプト記34, 6、おそらくまた33, 19を引用している。この両節は、ヤハウエの恵み深さや正しい配慮に関心を示す7 節を受け、シナイで啓示されたヤハウエの憐れみ、恵み、慈しみをほめたたえている。ヤハウエの恵みは、1-2 節ではただ暗示されたにすぎなかったが、7-9 節でははっきりと表現されている。ヤハウエの力と大きさを語るときには、神の恵みへの言及がおろそかになるが、7-9 節の恵みの強調はその点を補っているのである。145篇には、恵みと力強さというヤハウエの業の二つの面を結び付ける意図があったのではないだろうか。

iii) 10-13ab 節

この段落も、命令形賛歌の「賛歌への促し」と「賛歌そのもの」にそれぞれ対応する要素のコンビネーションから成っている。10-11節は *yiqtol* で表され、12節の結果を示す不定詞で締めくくられる。二つの名詞文から成る13ab 節では、ヤハウエの王的な支配が宣言されるとともに賛美されている。

10節には、ヤハウエの被造物と「敬虔なる人々」がヤハウエを賛美する、と述べられているが、ここではヤハウエの恵みについても、力強さについても言及されていない。しかしながら、10a 節の「あなたの被造物すべて」は9b 節の「その被造物すべて」を受けており、10b 節の「あなたの敬虔なる人々」(*hšydyk*)は8b 節の「慈しみ」(*hšd*)を引き継いでいるので、8-9 節

と10節との間に舞台設定の関連を想定することができる。すなわち、8-9節においてヤハウエから恵みと慈しみを享受した者が、10節において賛美をもってそれに答えるというシチュエーションが設定されているのである。そうだとすれば、10節はヤハウエの恵みの業に関わっていると見なすことができる。

11b節と12a節では、4b節に登場した gbwrh 「力強い業」(複数形)の語が再び使用され(単数形と複数形)、ヤハウエの力強さがテーマとなる。ヤハウエの恵みと慈しみを知った「被造物」と「敬虔なる人々」はヤハウエを賛美し(10節)、次にその力強さを物語る(11b. 12a節)。11a節と12b節には「王権」(mlkwt)の語が見られるが、この詩句にいたって、ヤハウエの王権においては、恵みと力強さの両面が統合していることがわかるのである。

この詩篇ではヤハウエの恵みの支配のイメージと、力に満ちた支配のイメージが交互に記述されており、この両者はヤハウエの王的支配において統合されているのである。これら支配の二側面を統合するヤハウエの「王権」は、13ab節において声高らかに賛美される。13ab節は、その短い詩句のなかに「王権」もしくは「統治」(mlkwtが二度、mmslhが一度)の語が三度も現れ、当詩篇全体のクライマックスと考えることができる。13ab節は恵み深くかつ力強いヤハウエの支配が永遠に続くことを賛美し、祈願している。

ところで当詩篇は、知恵文学の影響下にあること(アレフバート配列)や、11-13ab節に mlkwt (「王権」)の語が使用されていることなどを考慮すると、非常に後代の作だと考えられる。²⁰⁾また、13ab節はダニエル書3章33節および4章31節と関係していると思われるし(Dan 6, 27; 7, 14, 27も?)、この詩篇の他の箇所でも、ダニエル書と関連する詩句が見出される。²¹⁾さらにこの賛歌では、「王国」もしくは「王権」を意味する語が11-13ab節に集中して現れるが、これは、²²⁾詩篇記者が自家葉籠中の語彙を直接用いたからではなく、11-13ab節の「王国」もしくは「王権」概念を、「王国」もしくは「王権」に関心を持つダニエル書2-7章から受け入れた結果ではないかと思われる。以上から、詩篇145篇の作者はダニエル書のプトレマイオス王朝時代に作成されたと考えられる部分、すなわち2-7章を知っており、その一部を引用し²⁴⁾

たのではないかと推定される。当詩篇がダニエル書と同様に「王国」もしくは「王権」に強い関心を持ち、ヘレニズム時代のその書物の一部を引用しているとすれば、両者の成立の時代と、背後にあった状況とが互いに近いものであったことを想定してみるべきだろう。この詩篇がヘレニズム時代、より限定してプトレマイオス王朝期に成立した可能性は高い。

しかしながら、詩篇145篇とダニエル書2-7章におけるヤハウエの王権に対するイメージの違いにも注目すべきである。前者においては、ヤハウエの王権のなかには、ヤハウエの恵み深さと力強さが統合されている。しかし、ダニエル書ではもっぱら神の力強さが強調されており、²⁵⁾世俗の王権を上回る権力を持ったヤハウエが自ら望む者を世俗の王に任命するというイメージが記述されている(例えば、Dan 5, 21)。

詩篇145, 13ab はアラム語ダニエル書からの引用がヘブライ語に訳されたものだろう。詩篇145, 13ab の表現は確かにダニエル書3, 33もしくは4, 31と酷似している。ただし、上述のように、ダニエル書では神の偉大さと力強さが賛美されているのに対し、詩篇145, 13ab の王権の概念には、文脈から判断して、ヤハウエの力強さだけではなく、恵みと憐れみの豊かさが含まれているのである。

アラム語ダニエル書はヤハウエの並外れた力強さを強調している。同書は権力の強弱に関心を抱いていたが、詩篇145篇は、次項(iv.13cd-20節)で見られるように、社会的な弱者に関心を寄せている。当詩篇にとって重要なのは、たんに支配の大きさではなく、その質なのである。従ってこの賛歌は、ダニエル書で描かれた力強さとしてのヤハウエの王権のイメージを、恵み深さとしてのヤハウエの王権のイメージによって補ったものだ、ということが出来るであろう。

iv) 13cd -20節

この段落では抑圧された者たちが神から配慮を受ける様子が歌われており、明らかに恵み豊かな憐れみ深いヤハウエの王権のイメージが強調されている。

マソラ本文に欠けている13cd節の名詞文で意味されていることは、8節

でもそうであったように、ヤハウェがシナイ契約に忠実であり、その行為が憐れみ深いということだと思われる。それ以下の分詞文(14-16節。ただし、15a節は yiqtol)では、ヤハウェが抑圧されている人々を助け、すべて生けるものを満足させるというイメージが展開する。15-16節は、ヤハウェの充実した創造を歌う詩篇104, 27fと関連している。しかし、詩篇145, 15fのコンテクストは神の創造の行為ではなく、社会的な救済の行為である。これらの分詞文は、どの時代にでも、また、どこにでも及ぶヤハウェの一般的な恵みの行為が描かれているようにも見えるが、15節(16節も?)における食物への関心は、貧困が社会的な問題だった当時の状況が表現のすぐ背後にあることを示唆していると思われる。この詩篇が当時の大問題だった貧しい人々の状況と無関係に作られたとは考えにくいし、「敬虔なる人々」(10節)とか「ヤハウェを畏れる人々」(19節)という党派的なグループを表すテクニカル・タームが詩篇中に用いられている以上、²⁷⁾この詩の表現は当時の状況と密接に絡み合っていると見なすべきだからである。

17-18節(名詞文)でヤハウェに信頼を寄せる者たちへの彼の憐れみと支援が表明されたあと、ヤハウェが「彼を畏れる人々」の叫びを聞き、彼らを救って、「神なき者たち」すべてを滅ぼすことが述べられる(四つの yiqtol と一つの分詞)。ここでも、たんに一般的な苦難の状況ではなく、今救われるべき目の具体的な困窮の状況が表現の背景にあったと想定すべきであろう。「ヤハウェを畏れる人々」と自称し、被抑圧者と自覚する人々は当時、支配層の一部とともに、²⁸⁾政治・経済的および文化的、宗教的なヘレニズム化に反対していた。支配層の大部分はプトレマイオス朝の税金政策のもとで利益を得るために、政治・経済的のみならず、文化的、宗教的にもヘレニズム化を推し進めており、それにともなって多くの経済的な犠牲者も発生していた。²⁹⁾20節の「神なき者たち」は、一般的な不信心者を意味するにとどまらず、このようにヘレニズム化を推進する裕福な支配層を指していると思われる。詩篇145, 19-20は、ヘレニズム化を進めるこの「神なき者たち」をヤハウェが滅ぼし、「敬虔なる人々」もしくは「神を畏れる人々」の結束のうえに、ヤハウェを中心とした支配体制を構築する、というプログラムを提案してい

る。145篇によれば、その体制のなかでヤハウエの力強くかつ恵み深い支配は実現するのである。

v) 21節

この節は1-2節と共に、当詩篇全体を囲む枠としての機能を持つ。21a節の主語は「わたしの口」であり、これは1-2節の主語「わたし」に対応する。また、語根 brk と「名」の語および「いつまでも、永遠に」の表現がこの両枠に共通している。さらに、21a節の thlh の動詞形が2b節に見出される。

21b節の「すべて肉なるもの」による賛美は、ヤハウエの支配が世界の全住民に及ぶべきことを示している。すなわちこの詩篇は、「敬虔なる人々」もしくは「ヤハウエを畏れる人々」の救いを通して、ヤハウエの支配がイスラエルを超えて諸国民にまで及ぶヴィジョンを提示しているのである。

d. 詩篇145篇の批判的な機能

権力に関心を持つヘレニズム時代のヤハウエ共同体は、ダニエル書に見られるように、世俗の権力に対して、その限界性とそれに優るヤハウエの王権の力強さを主張し、ヤハウエの支配のもとに結束しようとしていた。この動きを発展的に受けて、145篇はヤハウエの王権の力強いイメージをその恵み深さのイメージによって補い、より高い王権の概念を提案したのである。

145篇にとって敵である「神なき者たち」は、プトレマイオス王朝の経済政策によって繁栄し、文化的にも宗教的にもユダヤのヘレニズム化を目指す人々であった。王朝とそれを支持するユダヤの支配層には、強い権力はあっても、恵みや憐れみといった支配者に備わるべきもう一つの面が欠落していた。当詩篇のなかでは、支配層に抑圧される「ヤハウエを畏れる人々」もしくは「敬虔なる人々」がヤハウエから恵みを受けるヴィジョンが描かれているが、権力者の無慈悲と無配慮にヤハウエの恵みの豊かさや憐れみの深さを対比させることによって、この詩は憐れみに基づいたヤハウエ中心の王国のプログラムを描き出すとともに、抑圧者としての世俗の権力を批判している。そもそも、世俗に「王」が現存するなかで、ヤハウエこそ本当の「王」、と

声高らかに歌い上げること（1b節）が、世俗の王に対する批判にならないはずはないのである。

ところで、この詩篇の作者は誰であろうか。この賛歌の技巧性から見て、訓練された専門の詩篇作者が考えられる。すなわち、レヴィびとである。捕囚後、レヴィびとの一部は神殿歌手として、伝承を受け、守り、次の世代に引き渡すという仕事を受け持っていたので、詩篇のなかに、当時の情報としてのさまざまな伝承を引き入れ用いることは容易だった。³⁰⁾ 当時は「敬虔なる貧しき人々」の政治的かつ宗教的な運動が展開していたが、³¹⁾ 下級祭司であるレヴィびとはこの運動に連帯していたのである。145篇は、レヴィびとによって、世俗の支配層に批判的な立場から制作された詩篇だと推定できる。

さて、詩篇の一類型である「賛歌」の機能については従来研究されてこなかったことははじめに述べた。せいぜい、祭儀のなかで神を美しく歌い上げ、そのことによって神に感謝の意を表すための詩歌という程度の理解しかなかったのである。しかしながら、以上の考察から、「賛歌」である詩篇145篇には、政治的・社会的かつ宗教的な状況のまっただなかで、その状況に深く関わってこれを批判し、ヤハウェを中心とした王国のプログラムを提示するという機能が備わっていることが明らかになった。これ以外の賛歌も批判的な機能を有していたのかどうか、丁寧に調べてみなければならないにせよ、イスラエルの「賛歌」の類型一般には詩篇145篇と同じように批判的な発言機能が備わっているという可能性も、いまや無碍に否定できないと思われる。

II. 詩篇146篇の解釈

146篇も「賛歌」の類型に属するが、この詩篇の場合は部分的にはあれ、明らかに世俗の権力への批判と見える警告が含まれている（3-4節）。しかし、この批判は当詩篇の主題には関係しないようにも見える。この批判的な警告は果たして、脈絡と関連なく、たまたま当詩篇に挿入されたものにすぎないのだろうか。それとも、主題と深く関わる詩の構成要素なのだろうか。ここでは、3-4節が他の部分とどのように織り成されているかを考察したい。³²⁾

以下に私訳を掲げるが、これも筆者の解釈を先取りしたものである。

1a ハレルヤ(ヤーハを賛美せよ)!

b わたしの魂よ、ヤハウエを賛美せよ! (imp)

2a 命のある限り、わたしはヤハウエを賛美する。(yiqtol)

b 長らえる限り、わたしはわたしの神に歌をうたう。(yiqtol)

3a 君侯たちに依り頼んではならない、(neg. + yiqtol)

b 人間(ベン・アダム)に。彼に救いの力はない。

4a 彼の霊は去る、彼は自分の土(アダーマー)に帰る。(yiqtol + yiqtol)

b その日、彼の思いは滅びる。(yiqtol)

5a なんと幸いなことか、ヤコブの神を頼みとする者は、(主文はNS)

b 彼の神ヤハウエに望みを置く者は。

6a (ヤハウエは)天と地を造られる、(pt)

b 海とそこにあるすべてのものを(造られる)。

c とこしえにまことを守られる。(pt)

7a 虐げられている人々のために裁き(ミシュパート)をされる。(pt)

b 飢えている人々に食べ物をお与えになる。(pt)

c ヤハウエは捕らわれた人々を解き放つ。(pt)

8a ヤハウエは見えない人々の目を開く。(pt)

b ヤハウエはうずくまっている人々を起こされる。(pt)

c ヤハウエは義なる人々を愛する。(pt)

9a ヤハウエは寄留の人々を守る。(pt)

b みなしごとやもめを支えられる。(yiqtol)

c 神なき者たちの道をくつがえされる。(yiqtol)

10a ヤハウエはとこしえに王としてとどまる。(yiqtol)

b シオンよ、あなたの神は代々に(王としてとどまる)。

c ハレルヤ(ヤーハを賛美せよ)!

(imp)

a. 構造

145篇と同様に、146篇の構造も命令形賛歌の様式と比較することができる。つまりここでも、導入部(1-4節)、賛歌そのもの(5節)、テーマの展開(6-10b節)、結び(10c節)と、命令形賛歌に似た構造を見出すことができるのである。³³⁾しかし、1節に命令形が現れるにせよ、賛美の勧めが会衆にはなく祈り手自身の魂に呼びかけられている点から見て、この詩の起源は命令形賛歌ではないと考えるべきかもしれない。³⁴⁾いずれにしても、ここにはさまざまな種類の形式が用いられている。³⁵⁾

私見によれば、この詩篇の主要部は10ab節を含めず、6-9節に限るのがよいと思われる。10節には、6-9節に記述されているようなヤハウエの行為が記されていないからである。主要部は、9bcを除いて賛歌的な分詞表現から成っており、ヤハウエの創造や救済の行為をたたえている。10節全体は結びとして、ヤハウエの王権を声高らかに歌い上げている。

ここでは、1-2節と3-5節を導入部と見たい。1-2節では、祈り手は自分自身に賛美を命じ、賛美の約束を述べているが、これは「個人的な感謝の歌」の様式を反映している。³⁶⁾3-5節には知恵文学の強い影響が見られる。すなわち、3節は知恵文学的な警告であり、4節はその根拠を示し、名詞文から成る5節も知恵文学に特徴的な「幸いなるかな」の定式を持っているのである。³⁷⁾

詩篇全体は神賛美を促す「ハレルヤ」の語によって囲い込まれている。

b. 「類型」と「生の座」

146篇は個人の祈り手による賛歌として規定できる。³⁸⁾この詩篇には「個人の感謝の歌」や知恵文学の諸要素が見出されるが、主要なモチーフは、1節の自分への賛美の促し、6-9節の賛歌的な分詞文、10節のヤハウエを王とする宣言のなかにある。従って、この詩は「賛歌」の類型に属するものとして規定できるのである。

この詩が「賛歌」であり、10節にあるような声高く歌うにふさわしい宣言を含むかぎり、公の祭儀のなかで歌われたと考えることができる。Fr. Crüsemann は、この詩篇にはとりわけ3-5節において知恵文学的な要素が見られるので、その「生の座」は「賛歌」のそれからは離れ、教育的な場で用いられたのではないかと推察する³⁹⁾。しかしながら、もしこの詩篇のなかに社会的な批判があり、政治的なプログラムの提案が見出されるならば、当詩篇が使用された場合は教育に限定できないのではないだろうか。以下で見るように、世俗の権力批判は3-5節にとどまらず、詩篇全体に及んでいる。しかも、6-9節にはヤハウエの王権のプログラムが記されている。そうだとすれば、当詩篇は教育の場というよりは、公の祭儀のなかで歌われ、祭儀共同体の賛同を受けたと見なすべきではないだろうか。

当詩篇が具体的にどのような祭儀で使用されたかは容易には推測できない。ただ、この詩篇にはシナイ契約を想起させる所があるので、背後に過越しの祭りなど、シナイ契約に関わる祭儀を想定することはできるように思われる。

c. 各部の考察

i) 1-5節

1-2節は詩篇103, 1fや104, 35、および104, 33と関わっているが、この例が示すように、この詩篇は他のさまざまな詩篇やテキストからそのモチーフを受け継いでいる⁴⁰⁾。

1-2節の祈り手の自分自身に対する賛美への促しと賛美の約束に続いて、3-5節に知恵文学的な表現が述べられるが、これは賛歌的な文脈からはずれているようにも見える。

3-4節はたんなる警告の言葉とその根拠づけのようにも思われるが、「君候」(ndybyym)に対する批判としても機能している。「君候」の語で念頭に置かれているのは、異邦人の権力者である⁴¹⁾。なぜなら、この詩篇が成立した捕囚後の時代には⁴²⁾、イスラエルは異邦人に支配されていたし、時代の政治的な関心は、何よりも、この異邦人支配とどのように関係すべきか、というところにあったからである。異邦人の支配者を信頼すべきか、これを拒否すべ

きかの論争はたゆまず続いていたはずなのである。

異邦人の権力に対する批判の中心点は「忠実さ」('mt。6節参照)の欠如にある。すなわち、異邦人のあいだで神々として通用するほどの権力を持っていた支配者たちも、結局はたんに死すべき人間として滅びざるをえないので、住民を救うような忠実さを持ち得ないのである。

忠実でありえない世俗の王権に頼る者たちとは対比的に、5節では、神なるヤハウエを信じる者たちがいかに幸いであるかが表明される。

「ヤコブの神」(5節)という表現は、守護神、救済神としてのヤハウエの機能を暗示しているとも読める。⁴³⁾しかしここでは、ヤハウエが異邦人の神ではなく、イスラエルの民の神であることが強調されているのであろう。⁴⁴⁾3-4節で神々として通用もする異邦人権力者に向けられた視線が、5節ではイスラエル自身の神に向けられているのである。イスラエルの神を表す「ヤコブの神」という名称は、文化的かつ宗教的な国際化に反対する態度を暗示しているように思われる。この詩篇がヘレニズム時代に成立したとすれば、「ヤコブの神」の語は反ヘレニズム化の意志表示となっているのである。

ii) 6-9節

知恵文学的な表現に続いて、当詩篇の主要部として一連の分詞文が並び(ただし9bc節では、一連の分詞文の後に突然 yiqtol が現れる)、ヤハウエの創造と救済の行為が語られる。この段落では、抑圧される人々を支え、神なき者たちを倒す、ヤハウエの支配のプログラムが提案されている。

ヤハウエの創造に言及する6ab節は十戒の言葉(Ex 20, 11)を引用しており、シナイの神を想起させる。ヤハウエの永遠の忠実さを表す6c節は申命記7, 9と比較でき、ヤハウエが契約にいつまでも忠実に行為することを述べようとしている。このヤハウエの忠実さは、3-4節に表されている世俗の支配者の可死性とは対極のものと見なされる。7-9a節では、契約に対する忠実さを具体的に示すヤハウエの行為が列挙される。

7a節は詩篇103, 6に関連するが、103篇はシナイ契約と密接な関係を持つ詩篇である。⁴⁶⁾

7b節における貧者に対するヤハウエの配慮が、単なる同情ではなく、契約に対応する行為であることは、7b節と似た表現を持つイザヤ書58,7とその文脈を参照すれば推定できる。そこでは貧しい人々への配慮が民の掟として与えられているが、それは、貧者への配慮が契約に忠実なヤハウエの意志に属しており、ヤハウエの民もその意志に従うべきだからである(Dtn 15,1-11も参照)。

7c節では、イザヤ書42,7や詩篇68,7との関連が見出せる。イザヤ書42,7には当詩篇の8a節も関係があるし、詩篇68,7の前節(6節)とは当詩篇の9節が共通の言葉(「みなしご」と「やもめ」)によってつながるのである。詩篇68篇は明らかにシナイにおける神を想起させる(9節と18節を参照)。第2イザヤではヤハウエと民とのあいだの新しい契約が提示されており(Jes 55,3)、ヤハウエが契約に従って自らの僕を通して捕らわれ人を救うことが告げられている(Jes 42,7)。これら他のテキストやその文脈との関連から、7c節の内容は契約に対するヤハウエの忠実さに関わっていることが分かるのである。

9ab節にある「寄留の人々」、「みなしご」、「やもめ」のコンビネーションは申命記に何度も現れるが、⁴⁷⁾9節はこのなかでもとくに申命記10,18と関連しているように思われる。⁴⁸⁾そこでは、契約に基づいてなされるヤハウエの行為が啓示されているのである。

以上の考察のように、詩篇146篇がさまざまなテキストとの関連のなかにあり、とりわけ第2イザヤを知っていたとすれば、その基底には、ヤハウエは彼の民とのあいだに契約を結んでおり(Jes 55,3)、その契約に基づいて、困難のなかにある民を支える、という契約のイメージがあると見てよいのではないだろうか。ヤハウエはシナイとモアブにおける啓示に違わず、契約に忠実に、憐れみと恵みをもって行為するのである。すなわち、ヤハウエは契約に忠実であるがゆえに、抑圧されている貧者を助けるのである。

8c節の「義なる人々」は9c節の「神なき者たち」と対比されている。ここでの「神なき者たち」は3a節の「君候たち」を指しているのではない。

異邦人の世界で神々として通用していた異邦の「君候たち」はヤハウエと対比されているのである。「義なる人々」と対比される「神なき者たち」とは、異邦の「君候たち」をあたかも神々であるかのように慕う同国人を指している。146篇がヘレニズム時代の作であるとすれば、この詩篇の背後にはヘレニズム化の賛否をめぐる論争があったであろう。145篇の解釈においても述べたように、当時の支配層はヘレニスト王朝の支配下で繁栄を享受していたので、王朝との関係の強化に積極的で、経済的な同化政策にとどまらず、文化的・宗教的にもヘレニズム化を推し進めていた。他方、ヘレニストの税政下に苦しむ人たちはヘレニズム化に反対し、同国の支配層が異邦の支配者に媚びを売るのを批判していた。ヘレニズム化に反対する貧しい人々はヘレニズム化を推進する人々を *rs'ym*（「神なき者たち」もしくは「逆らう者たち」）と呼び、ヘレニズム化の動きが挫折するのを心から望んでいたのである（9c節）。

反ヘレニズム化を訴えるこの詩篇において、神の恵み深い行為を列挙する7-9節には各文の先頭にヤハウエの語が来ており（7c. 8abc. 9a）、これによってヤハウエのもとにつどう者たちの「士気」を高揚させている。ヤハウエの名に祭儀共同体は狂喜しただろう。このようにして当詩篇は、死すべき「君候たち」の不忠実と鋭い対比をなすヤハウエの忠実さとその支配を印象づけている。これは世俗の権力に対する批判としても機能しているのである。

iii) 10節

出エジプト記15, 18とイザヤ書52, 7を思い起こさせるこの節は、ヤハウエの永遠の王権を告知している。世俗の支配に対して、ヤハウエの王権の永遠性が強調されている。シオンへの呼びかけによってヤハウエとその山との結びつきが確認されるが、その結びつきには反ヘレニズム化の意図が反映しているのであろう。10節はヘレニズム化に反対する「貧しい人々」に、反ヘレニズム化を訴える政治的なスローガンのように響いたに違いない。

d. 詩篇146篇の批判的な機能

146篇は上述のように知恵文学的な要素を持っており、後代の成立を想定させる。当詩篇は145篇の一句を改変引用している⁴⁹⁾ので、145篇成立の後に作成されたのだろう。ここでは次のような編集過程を推測しておく。

146篇は詩篇138-145篇の小歌集の後に置かれるものとして作成されたと思われる。すなわち、詩篇145篇は138-145篇を締めくくる詩として作成されたが、「最後のハレルヤ歌集」(Pss 146-150)はそれに連続するものとして編集され、全「詩篇」の後ろ枠として配置されたのではないか。従って、146篇は、145篇に連続する性格を持つとともに、「最後のハレルヤ歌集」の導入の詩篇として機能しているのである。そうであるとすれば、146篇は145篇の成立の直後、つまり、ヘレニズム時代、より厳密にはプトレマイオス王朝時代に成立したと考えられるのである。

146篇成立時の状況は、145篇のそれと同じであろうと推定できる。すなわち、ヘレニストの税制によって利益を得ていた支配層は、世界的な視野のもとに解放的な考え方をする進歩的な人々とともに、政治的、経済的のみならず、文化的、宗教的にもヘレニズム化を推し進めていた。しかし他方で、この税制によってより深刻な貧しさを強いられた人々は、ヘレニズム化に反対し、エズラ・ネヘミヤの宗教改革以来のヤハウェ信仰に固執してより閉鎖的な宗教を守ろうとしていたのである。

この詩篇の背後には、このような差し迫った現実の問題、とくにヘレニズム化の問題に関する論争があったのであり、それが詩篇の表現に反映していると考えられる。「捕らわれた人々」の解放(7c節)、「見えない人々の目」の癒し(8a節)、「みなしごとやもめ」の扶養(9b節)などは、現実そのものの写真ではないが、当時実際に政治的、社会的、経済的な抑圧を受けていた人々の救いのヴィジョンを象徴的に表している。

ヘレニズム化をめぐる二つの勢力のなかで、詩篇146篇は税制に苦しむ貧しい人々の立場からヘレニズム化に反対し、ヘレニストの権力とそれに追随する同胞の支配層を批判している。この詩は祭儀において歌われたと考えられる。祭儀共同体の高揚のなかで、世俗権力を否定するヤハウェの王権の主

張は、政治的なスローガンとして響いたであろう。

そうだとすれば、警告的な言葉(3-4節)は、賛歌の文脈のなかに、「人は本当は誰に頼るべきかを明らかにする」⁵⁰⁾ためだけに置かれているのではないことになる。この警告的な言葉に含まれる世俗の王権に対する批判は賛歌の目標そのものでもあったのである。

Ⅲ. 編集について

ここでは145篇と146篇に関わる編集の経緯と意図を簡単に描いてみたい。

145篇は小詩篇集138-145篇のなかに属していると考えられる。このことはこれら八つの詩篇に共通の *ldwd* (「ダビデの詩」) という表題から推察できる⁵¹⁾。これらは編集者によって、ダビデの口由来する詩篇として設定されたのである。

この小詩篇集の中心には「ダビデ」による四つの嘆願の詩があり (Pss 140-143)、それらは信頼を表明する二つの詩篇 (Ps 139とPs 144) によって囲まれている⁵²⁾。140篇から143篇までは、ヤハウェが恵みを示して、「義人」⁵³⁾に属する祈り手としての「ダビデ」を「神なき者たち」⁵⁴⁾から「救い」⁵⁵⁾、「守り」⁵⁶⁾、「敵」⁵⁷⁾を「滅ぼす」⁵⁸⁾ようと願っている。それらを囲む139篇と144篇では、ヤハウェが個々人と親しい交わりをもつことが歌われている。

以上の詩篇をさらに外から枠として囲む138篇と145篇は、共通の言葉によって互いに関連している⁵⁹⁾。ヤハウェの名をほめたたえる両詩篇は、共に出エジプト記34, 6のシナイにおけるヤハウェの発語を暗示しており (Ps 138, 2とPs 145, 8)、それが両詩篇の中心的なモチーフとなっている。138篇はヤハウェの慈しみを賛美し、145篇は力強いヤハウェの王権のイメージを慈しみ深い王権のイメージで補っており、両詩篇が強い関連のもとにあることが分かる。

歌集138-145篇の編集者は、ヤハウェの行為の恵み深さを強調する145篇の作者と近い立場に立っているように思われる。140-143篇はヤハウェに恵みの業の行使を願っているし、139篇と144篇は、個々人と親しい交わりを持つヤハウェの憐れみ深さを表白している。編集者は、138-145篇を「ダビデ」

の口に由来する一つの大賛歌と見なし、「すべて肉なるもの」(Ps 145, 21)がこの大賛歌に声を合わす、というイメージを持っていたのではないか。⁶⁰⁾

ところで、詩篇138-145篇のダビデ集は「詩篇」編集者によって意図的に137篇の直後におかれたと考えられる。この小詩篇集は「詩篇」編集者にとって、詩篇137, 3-4の「嘲笑う民」の皮肉な依頼(「歌ってみよ、ヤハウエの歌を」)に答えた「ヤハウエの歌」にはかならなかったのではないだろうか。⁶¹⁾小詩篇集138-145は救いの祈願であり、ヤハウエの王権のプログラムである。ヤハウエの共同体は異邦人の支配のもとで、その歌集を歌ったのである。「詩篇」の編集者は、歴史的には捕囚の後のことではあるが、当時の異邦人支配をなおも続く「捕囚」と理解し、かつて捕囚の地で嘲笑のなか、歌うように促された「ヤハウエの歌」(Ps 137, 4)への返答歌としての138-145篇を137篇の後に配置したのである。「詩篇」編集者の理解によれば隠喩的な意味でまだなお「捕囚」にあつて異邦人の権力下に苦しんでいる138-145篇の祈り手は、世俗の権力と同じように強権を誇るヤハウエ支配というよりは、むしろ恵みに満ちあふれたヤハウエの王権を強調しようとしたのである。

145篇と「最後のハレルヤ歌集」(Pss 145-150。すべて「賛歌」!)筆頭の146篇とは、語彙やイメージを共通にしているところがあり、互いに関連し合っている。⁶²⁾このことは、「詩篇」編集者が146-150篇を全「詩篇」の枠として編集するさい、この詩篇グループを意図的に145篇の後ろに配置したことを暗示している。⁶³⁾「詩篇」を締めくくるこの「ハレルヤ歌集」は、ヤハウエの慈しみ深い王権のイメージによって力強い王権のイメージを補うという145篇の趣旨を受け、「敬虔なる人々」⁶⁴⁾を助ける恵み豊かなヤハウエの行為をほめたたえている。最後に150篇はヤハウエの力強く大きな業を賛美するが(2節)、編集者にとって、この力強い神の王権の概念が慈しみ深い神の王権のイメージによってすでに補いを受けたものであることは、150篇が、慈しみを強調する149篇の直後に置かれていることから推察できるのである。

145篇においては、「わたし」がヤハウエの支配の力強いイメージを恵みの

イメージで補い、力強さと慈しみ深さを統合する王権の概念を提示した。それによって同時に、力だけを求める世俗の支配を批判したのである。続く146篇の「わたし」は、とこしえまでも契約に忠実なヤハウェが恵みの神であることを主張している。このことによって、この詩篇も死すべき不忠実な世俗の支配者を批判しているのである。

両詩篇は「ヤハウェとその民」という基本的な支配関係を貫いて主張している。第2イザヤが告知するように(Jes 55, 3)、ヤハウェはその「民」と新しい契約を結んだ。「民」は新しいイスラエルとして、古いイスラエルを乗り越える共同体を形成する。それと同時に、ヤハウェとその民の間に入り込もうとする中間的な権力をいっさい拒否するのである。

「最後のハレルヤ歌集」(Pss 146-150)においても、新しい契約に基づく「ヤハウェとその民」の関係が貫かれている。神の恵みを享受する新しい「民」はヤハウェの賛美を促される。この新しい「民」は「貧しい人々」⁶⁵⁾、「彼(ヤハウェ)を畏れる人々」⁶⁶⁾、「彼(ヤハウェ)の慈しみを待ち望む人々」⁶⁷⁾、「彼(ヤハウェ)の民」⁶⁸⁾、「敬虔なる人々(ヤハウェの慈しみに生きる人々)」⁶⁹⁾などと呼ばれる⁷⁰⁾。新しい「民」はいまやイスラエルに限らない。被造物すべてが、神の意志に従って、神を畏れ、その慈しみに生き、その慈しみを待ち望むかぎりにおいて、ヤハウェの「民」に属し、その恵みを知ることができるのである(Ps 147, 8 f; 148, 14; 149, 4)。全被造物は神の前で平等に置かれており(Ps 148, 1-4. 7-12; 150, 6)、声を合わせて神を賛美すべきなのである(Pss 148-150)。

ヘレニズム時代に成立したであろう146-150篇は、ヤハウェ以外の権威を認めず、ヤハウェ信仰の国際化(ヘレニズム化)に反対している。しかしながら、これらの詩篇は、すべての被造物が神の前で平等であり、それらが神を信頼する限りで、彼の「民」に属し、彼を賛美することができる主張しており、その意味で普遍性を持っていると言える。

146篇の作者(グループか?)も「最後のハレルヤ歌集」の編集者(グループか?)も、145篇の作者(グループか?)と非常に近い立場に立っている。彼らは豊かな伝承を保持していた専門の詩篇作者レヴィびとだと想定できる。

145篇の項で述べたように、下級祭司レヴィびとは当時、「貧者」と連帯して、支配層による開放政策（ヘレニズム化）に反対していたのである。

結 び

以上の考察によれば、145篇と146篇の二つの「賛歌」には当時の王権（王国）に対する批判が見出せる。また、それらの詩篇に関する編集作業（Pss 138-145および Pss 146-150）は、「賛歌」の類型を意識していたわけだが、そこにもやはり批判的な働きが看取される。他の賛歌をさらに調べてみなければならぬにしても、「賛歌」の類型には背景の現実社会と批判的に関わる機能があったと見ることは不可能ではない。そもそも、ヤハウエ賛美、とりわけ「ヤハウエは王」という宣言には、ヤハウエと民の間に立とうとする世俗的な仲介者を含めて、ヤハウエ以外のいっさいの権威や王権を認めないという裏の意味があるのだから、それは信仰告白的であるだけでなく、政治的な批判発言としても理解できるのである。イスラエルの「賛歌」は常に、政治的かつ宗教的な激しい論争のただなかで成立し、その論争に答える著者グループの主張の場として使用されたと考えられるのである。

以上の理解が正しければ、イスラエルにおいては、「詩篇」以外に見出される美しい「賛歌」の言葉の背後にも為政者に対する批判的な態度があったと見なすことができるであろう。とりわけ預言書のなかに見られる「賛歌」⁷¹⁾は、王国や王権の論争に関わる政治的な主張であるかもしれず、この可能性をいつも念頭に置きながら読んでいくべきではなかろうか。

詩の表現は状況に一方的に制限されるものではなく、状況に作用し、これを動かしていこうとする創造的な力を持っている。従って、今後の聖書研究においては、言葉の「意味」にとどまらず、言葉の「力」にもより多くの注意を向けていく必要があるように思われる。

註

- ※ 本稿は1995年秋にミュンヘン大学に提出した学位論文の一部を邦語訳し、単論文中に書き改めたものである。

- 1) 詩篇の類型研究の大枠は H. Gunkel/ J. Begrich, *Einleitung in die Psalmen* (Göttingen 1. Aufl. 1933) が決定した。詩篇の類型としての「賛歌」の研究は、Fr. Crüsemann, *Studien zur Formgeschichte von Hymnus und Danklied in Israel, Neukirchen-Vluyn 1969* がもっとも詳しい。
- 2) 「詩篇」の編集史的研究は N. Faglistter, N. Lohfink, K. Seybold らを先駆として、E. Zenger や F.-L. Hossfeld らが精力的に推進している。この二人による「詩篇」の注解書は NEB のシリーズのなかで現在刊行中である。この研究方法については拙稿「詩篇の様式と編集」(『現代聖書講座』第 2 巻、木幡・青野編『聖書学の方法と諸問題』、日本キリスト教団出版局 1996、所収) を参照されたい。
- 3) E. Zenger に従う。彼の *Mit meinem Gott überspringe ich Mauern*, Freiburg/Basel/Wien 1987, pp. 39-69, *Ich will die Morgenröte wecken*, Freiburg/Basel/Wien 1991, pp. 47-49、また、F.-L. Hossfeld と共著の注解書 *Die Psalmen 1-50* (NEB), Würzburg 1993, pp. 5-16 (とくに p. 12) などを参照。
- 4) 例えば、Fr. Crüsemann, *op. cit.* pp. 270. 296-298 を参照。
- 5) 古代イスラエルでは、政治問題は即宗教問題であった。
- 6) ヘブライ語動詞の時制は近代語のそれとは一致しないので、いわゆる「未完了形」、「完了形」の名称は避け、動詞 *qtl* のカル 3 人称男性単数形の *yiqtol* と *qatal* をそれぞれの名称として用いる。なお、以下に使用する NS、pt、imp、inf の略語はそれぞれ、名詞文、分詞形、命令形、不定形を意味する。
- 7) マソラ・テキストの *wdbry* は LXX に従って *ydbrw* と読み替える。
- 8) LXX およびベシッタに従ってマソラ・テキストの 3 人称を 2 人称で読む。
- 9) 註 8 と同様。
- 10) 145 篇はアレフベート詩であるが、ヌンの文字で始まる詩行が欠落している。ここでは LXX およびベシッタによって再構成したものを訳出している。
- 11) 命令形賛歌については、Fr. Crüsemann, *op. cit.* pp. 19-82 を参照。
- 12) 一般には、賛歌における *ki*-文は賛美の理由を表わすと考えられている。これに対して Fr. Crüsemann は、*ki*-文から本来の賛歌そのものが始まると理解する。Ibid. pp. 32-35 を参照。
- 13) 12 節は不定形だが、これは前文の定形動詞文の結果を表している。
- 14) 「賛歌的な分詞」については、Fr. Crüsemann, *ibid.* pp. 83-154 を参照。
- 15) H.-J. Kraus, *Psalmen 60-150*, BK XV/2, Neukirchen-Vluyn 6. Aufl. 1989 (以下 *Komm. II* と略す), p. 1128。
- 16) 文学的な技巧によって、以下に見るような政治的に不穏な主張をカムフラージュすることができるのである。
- 17) ヤハウェを「王」とする称号については、H.-J. Kraus, *Psalmen 1-59*, BK XV/1, Neukirchen-Vluyn 6. Aufl. 1989, pp. 94-99、W. H. Schmidt, *Alttestamentlicher Glaube in seiner Geschichte*, Neukirchen-Vluyn 6. Aufl. 1987, pp. 170-178 を参照。
- 18) 詩篇 145 篇の成立時代については、「iii. 10-13ab 節」の項を見よ。

- 19) H.-J.Kraus, *Komm.* II. p.1129によれば、ここでの *šdqh* と *ṭwb* は同義で、ともにヤハウェの「救いに対する忠実さ」を表す。
- 20) *Ibid.* p.1128. *mlkwt* の語は、多くは歴代志、エズラ記、ネヘミヤ記、エステル記、ダニエル書、コーヘレトのような後代の作品で用いられている。
- 21) 例えば、Dan 4,33f 「…栄光と輝きは再びわたしに与えられて、王国の威光となった。それゆえ、わたしネブカドネツアルは天の王をほめたたえ、あがめ、賛美する。み業はまこと、その道は正しく、おごる者を倒される」と Ps 145,11a 「あなたの王権の栄光」、12b 節 「あなたの王権の栄光に満ちた輝き」、17a 節 「ヤハウェはそのすべての道において正しい」、20b 節 「(ヤハウェは) すべて神なき者たちを滅ぼされる」。
- 22) *mlkwt* は 11a, 12b, 13a (2回) で、*mmšlh* は 13b で使われている。
- 23) *mlkw*: Dan 2,37; 7, 14, 27他、*sltn*: 3,33; 4,19,31; 6,27; 7,6,14, *yqr*: 2,37; 4,27,33; 5,18,20; 7,14, *rbw*: 4,19,33; 5,18; 7,27。
- 24) ここでは R.Albertz に従って、ダニエル書 2-7 章のほとんどを反プトレマイオス王朝の動きに関わるものと見なす。詳しく言えば、該当する箇所は Dan 2,1-6,29; 7,1-7ab α, 9f, 11, 13-19, 22a, 23, 26ab α-27f. である。R.Albertz, *Religionsgeschichte Israels in alttestamentlicher Zeit 2*, Göttingen 1992, p.651 Anm.83を参照。
- 25) 例えば、Dan 3,33 「神のしるしは、いかに大きいか。不思議なみ業は、いかに力あることか」。ヤハウェの力の強さの強調に比して、その恵みや慈しみへの言及はきわめて少ない (例えば 4,24)。
- 26) ヘレニズム時代、貧しい人たちは重い税制のもとで負債によって奴隷になる恐れを抱いていた。R.Albertz, *op.cit.* pp.594f. 参照。
- 27) 「敬虔なる人々」が一般的な意味ではなく、特定のグループを指す語であることは、詩篇 149, 1 によく顕れている (5, 9 節をも参照)。「ヤハウェを畏れる人々」は、詩篇 33, 18 や 147, 11 で「ヤハウェの慈しみを待ち望む人々」と並行して用いられ、やはり特定のグループを指すものと考えられる。ヘレニズム時代に党派化してきた貧者グループは、自分たちを「貧しい人々」、「敬虔なる人々」、「ヤハウェを畏れる人々」、「義なる人々」などと呼んだ。
- 28) R.Albertz, *op.cit.* p.597. R.Albertz によれば、当時、裕福で社会的にも恵まれた人々のなかには、宗教的には保守的ともいえる貧しい人々と連帯し、伝統的な信仰を守りろうとする者たちもいたのである。
- 29) *Ibid.* pp.595-598。
- 30) 伝承にかかわるこのような仕事のゆえに、彼らは後の律法学者の先駆と考えられる。A.H.Gunneweg, *Leviten und Priester*, Göttingen 1965, p.214を参照。また、1 Chr 24,6、2 Chr 19,11; 34,13を参照。
- 31) この運動はセレウコス王朝下のマカベア戦争につながっていく。“Armenfrömmigkeit” の発生と発展については、R.Albertz, *op.cit.* pp.569-576を参照。
- 32) N.Lohfink が 4 節と創世記 3, 19 や詩篇 1, 6 との比較、7-9 節と様々なテキストと

- の対照を通して、世俗の支配に対する当詩篇の批判を指摘している点、注目される。Lobgesänge der Armen (SBS 143), Stuttgart 1990, pp.111-114.
- 33) K.Koch, Was ist Formgeschichte, Neukirchen-Vluyn 5. Aufl. 1989, pp.198-200.
- 34) Fr.Crüseemann, op.cit. pp.298-304を参照。彼は詩篇146篇を「ヤハウェを第三者として述べる個人の賛歌」と規定している。
- 35) H.Gunkel, Die Psalmen, Göttingen 6. Aufl. 1986 (以下Komm.と略す), p.612。
- 36) H.-J.Kraus, Komm.II, p.1132。
- 37) Fr.Crüseemann, op.cit. p.299 Anm.4。
- 38) H.Gunkel, Komm. p.612; H.-J.Kraus, Komm.II, p.1132; Fr.Crüseemann, op.cit. pp.298-304。
- 39) Fr.Crüseemann, ibid. p.299。
- 40) H.Gunkel, Komm. p.612; A.Deissler, Die Psalmen, Düsseldorf 6. Aufl. 1989, p.560を参照。
- 41) H.Gunkel, ibid.。
- 42) 146篇の成立の時代については「d.詩篇146篇の批判的な機能」を参照。
- 43) Ps 46,8.12; 81,2、また、H.-J.Kraus, Komm.II, p.1132を参照。
- 44) 異邦人らはヤハウェを「ヤコブの神」と呼んでいたようである。Jes 2,3=Mi 4,2; Ps 94,7参照。
- 45) 「…あなたの神、ヤハウェは忠実な神である。この方は、その戒めを守る者には千代にわたって契約と慈しみを守られる」。申命記では、言うまでもなくモアブにおけるシナイ契約の更新が問題になっている。
- 46) 出エジプト記34,6を引用している詩篇103,8を参照。
- 47) 10,18; 14,29; 16,11.14; 24,17.19-21; 26,12f; 27,19。さらに、Ex 22,20f; Jer 7,6; 22,3; Ez 22,7; Sach 7,10; Mal 3,5; Ps 94,6を参照。
- 48) 146篇の内容と同様、申命記10,18ではヤハウェが「みなしご」、「やめめ」、「寄留の人々」らの権利を守り、生活必需品を与えると述べられている。
- 49) 詩篇145,14bと146,8bを比較せよ。145篇が146篇を引用した可能性、また、共通のテキストから両者が並行して引用した可能性もある。ただ、146篇は他のテキストへの依存度がきわめて高く、他のテキストからの表現を作者の意図のもとで組み合わせた作品という印象が強いので、146篇の方が145篇を引用したと推定する。
- 50) H.Gunkel, ibid.。
- 51) E.Zenger, Ich will die Morgenröte wecken (前掲書。註3を見よ), p.251。
- 52) Ibid. p.252。
- 53) šdyqym: Ps 140,14a; 141,5a (sg.); 142,8c。また、次の語も参照。'ny: 140,13b; 'bynym: 140,13b; yšrym: 140,14b; 'bdk: 143,2a.12c。
- 54) rš': Ps 140,5a.9a; 141,10a (pl.)。また、次の語も参照。'dm r': 140,2a; 'yš ḥmsym: 140,2b.5b.12b; 'yš lšwn: 140,12a; p'ly 'wn: 141,4c.9b; rdp̄y: 142,7c。
- 55) ḥlš (pi): Ps 140,2a; nšl (hi): 142,7c; 143,9a; yš' (hi): 142,8a; 143,11b。

- 56) šmr: Ps 140,5a; 141,9a; nšr: 140,2b.5b。
 57) 'wybym: Ps 143,3a (sg.) .9a.12a。
 58) šmt (hi): Ps 143,12a; 'bd (hi): 143,12b。
 59) šm: 138,2 (2回) //145,1c.2b.21b; ḥsd: 138,2c.8b//145,8b,17b; drkym: 138,5a//
 145,17a; kbwd: 138,5b//145,5a.11a.12b; l'wlm: 138,8b// 145,1c.2b.21c; m'sym:
 138,8c//145,4a.9b.10a; (さらに ydh (hi): 138,1b.2b.4a// 145,10a; 'mt: 138,2c//
 145,18b; Wz.gdl: 138,2d.5b//145,3(2回).6b.8b; Wz.rwm: 138,6a// 145,1b)。
 60) E. Zenger, op.cit. pp.251f. 参照。
 61) Ibid. p.253。
 62) 「うずくまっている人々」(hkpwpym)の「支援」(zqp):Ps 145,14//146,8; 'hb: 145,
 20a//146,8c; šmr: 145,20a//146,9a; drk: 145,17a// 146,9c; ヤハウエの王権: 145,
 1.13//146,10; 弱者の救い: 145,14-16.19-20//146,7-9; 「神なき者たち」(rs'ym)
 の壊滅: 145,20b//146,9c; bn 'dm: 145,12a(pl.)//146,3b (さらに、'mt: 145,18b//
 146,6c; l'wlm: 145,1c.2b.21c// 146,6c)。
 63) 145篇は146篇だけではなく、147-150篇の各詩篇とも、並行する表現によって関連
 している。食物の授与: Ps 145,15f// 147,9; gdwl: 145,3a//147,5a; 弱者の支援と「神
 なき者たち」の壊滅: 145,20//147,6; yr'yw: 145,19a//147,11a; ḥsydym: 145,10b//
 myhlym ḥsdw: 147,11b。ヤハウエの名の賛美: 145,1c.2b.21b// 148,5a.13; hwd:
 145,5a// 148,13c; ḥsydym: 145,10b// 148,14b; qrbw yhw; 145,18a// qrbw:
 148,14c; thlh: 145,21a//148,14b。ḥsydym: 145,10b// 149,1c.5a.9b; thlh:
 145,21a// 149,1c; 王としてのヤハウエ: 145,1b//149,2b; ヤハウエの名の賛美:
 145,1c.2b.21b// 149,3a; kbwd: 145,5a.11a.12b//149,5a; hdr: 145,5a.12b//149,9b。
 gbwrwt: 145,4b.11b.12a// 150,2a; gdwl: 145,3a.8b (gdwlh: 3b.6b)//150,2b。
 64) ḥsydym: Ps 148,14b; 149,1c.5a.9b。他にも「敬虔なる人々」を指すと思われる語
 がある。それは 'šwqym (146,7a); kwpym (146,8b); šdyqym (146,8c); 'nwym
 (147,6a; 149,4b); yr'yw (147,11a); myhlym ḥsdw (147,11b)などである。
 65) 'nwym: Ps 147,6a; 149,4b。
 66) yr'yw: Ps 147,11a。
 67) hmyhlym ḥsdw: Ps 147,11b。
 68) 'mw: Ps 148,14a; 149,4a。
 69) ḥsydym あるいは ḥsydyw: Ps 148,14b; 149,1c.5a.9b。
 70) 上述の名称以外に、次のものがある。「心の打ち砕かれた人々」(šbwry lb): Ps 147,3a,
 「あなた(エルサレム)のなかにある子ら」(bnyk bqrbk): 147,13b、「彼(ヤハウエ)
 の近くにある民」('m qrbw): 148,14c。
 71) 第2イザヤには、注目すべき「賛歌」が数多く見られる。Fr. Matheus, Singt dem
 Herrn ein neues Lied (SBS 141), Stuttgart 1990参照。